僕とお米の未来

宇和島市立津島中学校 2年 堀川 拓真

今年も待ちに待った新米の季節がやってきた。つやつやでもちもちの炊き立ての新米はどんな料理にも勝る最高の食べ物だと僕は思っている。

僕の家は、両親とも会社員でありながら、祖父の代から米作りをしている兼業農家だ。毎年、五十ヘクタールほどの田んぼで米を栽培している。大規模ではないが、家族四人と親戚に分けても十分すぎるほどの量を収穫できる。祖父や父が一生懸命に田んぼで作業をする姿を小さい頃から見ていた僕は、祖父が亡くなった後、少しずつ父の手伝いをするようになった。

僕の住んでいる地域では、毎年四月に田植えをして、八月のお盆頃に稲刈りをするという早期栽培という方法で米作りをしている。早期栽培を調べてみると、普通期栽培が六月から十月ごろに行われるのに対して、より早

い時期に収穫する栽培方法であり、西日本を
中心に普及している。主に台風による被害を
受ける前に収穫を済ませるためであり、強風
や長雨により稲が倒れたり、日照不足となっ
て米が十分に熟されず収穫量が減少したりす
る心配も少なく、安定した収穫が期待できる
そうだ。
僕の住んでいる宇和島市津島町は、愛媛県
内でも一番早く稲刈りが始まる地域であり、
山間部で育った母がこの津島町に嫁いできた
時、田植えと刈り入れ時期が他と違うため、
季節感がない感じていたという。
最近では、米を作る人たちも高齢になり、
米作りをやめてしまう人も増えていると父が
言っていた。米作りは何よりも手間がかかり、
ひえなどの雑草を取るのには相当の時間がか
かる。日頃仕事をしながら、毎年毎年このよ
うに大変な作業をしている父を、純粹に尊敬
している。だからこそ、僕が大人になった
ときに父と同じことができたらどうか、会社

勤めだけでも忙しいのに、米作りと両立でき
るだろうか。時々思う。
稲刈りの日、父と一緒にコンバインが回る
スペースや田んぼの四隅を手作業で刈る端刈
りという作業をした。僕は一株ずつしか刈る
ことができなかったが、父は三株、四株と一
度に刈っていた。広い田んぼの狭い一角であ
ったが、炎天下の中の作業は大変だった。そ
の時父は「昔は機械がない時代だったから、
皆すべて手作業で田植えから稲刈りまでして
いたんだぞ。昔のことを考えると、今は機械
が全部やってくれるから、随分と楽になった。
お前が米を作る頃には、もっと機械化が進ん
で何もかもやってももらえる時代が来るんじや
ないか。」と話してくれた。
確かに、僕が大人になった頃には機械の技
術も上がり、田植えから稲刈りまで全部機械
が行うようになるかもしれない。しかし、僕
はそれをやりがいが無いように思い、少し寂
しい気持ちになった。また、すべて機械で行

うのではなく、先人の知恵や経験の中での感
覚などもおいしい米作りに欠かせないものだ
と思う。
祖父の米作りを父が受け継いだように、僕
もまた父から受け継ぎたいと思う。まだまだ
分からないこともあるが、父を手伝いながら
少しずつ覚えていきたい。
今年も無事に稲刈りが終わった。例年通り
の収穫だったと父はうれしそうだ。毎年手伝
いをしてしているからだろうか。僕はその喜びを
年々強く感じるようになってきた。今日も母
が新米で塩むすびを握ってくれる。その塩む
すびは、夏の日差しを浴びてきらきらに輝い
ていた。